

第 37 回全国大会東洋英和女学院大学大学院にて開催



深町正信 東洋英和女学院院長 大会会場校挨拶

第 37 回全国大会プログラム

総合司会:三宅ひろ子(昭和女子大学)

10:00-10:10 大会実行委員長挨拶:竹下裕子
(東洋英和女学院大学)

会長挨拶:吉川 寛(中京大学)

10:10-11:40 基調講演:「韓国における英語事情
の変化—英語教科書とテレビCMに見る—」
吉川 寛(中京大学)

11:40-12:00 会員総会

12:00-13:10 昼食休憩

13:10-14:25 研究発表前半

司会:山口美知代(京都府立大学)

1. 要通訳刑事手続におけるリングフランカとしての英語
(*in Japanese*)

ヤコブ・E・マルシャレンコ(名古屋外国語大学)

2. スカイプによる日本・フィリピン異文化理解プロジェクト
(*in Japanese*)

阿佐美敦子(実践女子大学)

3. Assessing English Proficiency in the EIL or ELF
Classroom (*in English*)

中村優治(慶應義塾大学)、Ju Seong (John) Lee
(University of Illinois at Urbana-Champaign)

14:25-14:35 休憩

14:35-16:15 研究発表後半

司会:トレント信子(東洋英和女学院大学)

4. Second Language Learners' Perception of Their
English Pronunciation: An Investigation of
European and Asian Attitudes (*in English*)

柴田美紀(広島大学)

5. Introducing English as an additional language for
the Japanese (*in English*)

川島智幸(群馬大学)

6. Globalizing Linguistic Landscape in the Japanese
Public Ladies' Room (*in English*)

米岡ジュリ(熊本学園大学)、
齋藤智恵(国際医療福祉大学)

7. An analysis of the development of ESP in China
through Chinese ESP publications (*in English*)

SHI Jie(電気通信大学)

16:15-16:25 休憩

16:25-17:45 シンポジウム:「ミャンマーの現在を見

つめて—その史的背景と英語教育」 (in Japanese)

司会: 齋藤智恵(国際医療福祉大学)

発題:

「変わりゆくミャンマー」橋内武(桃山学院大学)

「ミャンマーの教育制度と大学英語教育—近代の移り変わり」齋藤智恵(国際医療福祉大学)

「大学英語教育の現在と未来—バイリンガル IT 技術者の育成をめざすミャンマー: ヤンゴン工科大学」

加藤三保子(豊橋技術科学大学)

17:45 - 17:55 閉会の辞: 渡辺宥泰(法政大学)

第 37 回全国大会を終えて

大会実行委員長・竹下裕子
(東洋英和女学院大学)



第 37 回全国大会は 2015 年 12 月 5 日(土)、東京都港区の東洋英和女学院大学大学院で開催された。2014 年冬の内田洋行東京ユビキタス協創広場 CANVAS 以来、1 年ぶりの東京開催である。内田洋行の最先端技術を駆使した「動的な」大会とは対照的に、今大会は厳かな学舎の一教室で開催された。

会場校挨拶は、大学長ではなく院長にお願いした。大学は横浜にあり、六本木が本拠地ではないという

理由もあったが、何よりも、深町正信院長と本名信行名誉会長のご縁ゆえに、院長が適任者と考えた。

深町院長は、1990 年より 2008 年まで青山学院院長を務め、2008 年に青山学院名誉院長および青山学院大学名誉教授になった。本名名誉会長が青山学院大学の現役時代、学院の英語教育の改革を実現した裏には、院長の支援があったとお聞きしている。そして 2015 年師走、お二人が六本木で再会し、第 37 回全国大会が開催されたのであった。

三宅ひろ子総司会(昭和女子大学)の導きにより、大会は円滑に進んだ。吉川寛会長による基調講演、山口美知代会員の司会のもとに行なわれた 3 件の研究発表、そしてトレント信子会員の司会のもとに行なわれた後半 4 件の研究発表はどれも大変に興味深く、聴衆の多くの挙手にもかかわらず、質疑応答の時間が不十分であったことが心残りであった。詳細は、次の渡辺宥泰会員による報告をお読みいただきたい。

最後のシンポジウムでは、司会進行も務めた齋藤智恵会員(国際医療福祉大学)が、橋内武会員(桃山学院大学)と加藤三保子(豊橋技術科学大学)とともに、学会史上初めて、ミャンマーに注目した。ニュースレター第 42 号に掲載されたとおり、3 氏は本学会第 9 回海外研修でミャンマーを訪問した。今回、海外研修をきっかけに調査・研究し、発展させた内容が披露された。詳細は、研究発表と同様に、渡辺会員の考察をお読みいただきたい。ミャンマー人との英語によるコミュニケーションの実践経験をもつ会員はわずかであろう。本シンポジウムが、そのような機会の増加のきっかけとなることを願いたい。橋内会員はミャンマーの伝統衣装ロンジーで正装していたことを加えておく。

あっという間に過ぎた午後の部は、渡辺宥泰会員(法政大学)が締めくくった。渡辺会員の閉会の辞により、プログラムの内容のすべてが、会員にとって有意義で啓蒙的であったことが再確認された。

今大会は、本務校ではあるが勤務地ではないという心許ない立場の実行委員長のもとで開催されたため、配慮が行き届かなかった点をお詫びしたい。同時に、多くの会員のご支援とご協力をいただき、嬉しく思っている。特に、プログラム作成にあたり、多くの時間と知恵をお借りした齋藤・三宅両理事、会場視察に新幹線で駆けつけてくださった榎木菌事務局長に、心より感謝申し上げます。2016年夏、中京大学で開催される次大会が、本学会のさらなる発展の時となることを願う。

第37回全国大会 基調講演・研究発表 シンポジウム概要

渡辺宥泰(法政大学)

本学会会長・吉川寛氏(中京大学)による基調講演は、1999年の先行研究との対照を通して、韓国と日本の英語に対する意識の変化を明らかにした。論証の資料は、両国の中学生用英語教科書とテレビCMである。延べ2,000ページを優に超える教科書の内容分析と600点に及ぶCMの録画・視聴に要した時間と集中力には圧倒される思いであった。言語研究では豊富なデータ収集と緻密な分析が説得力の基礎となることを、会長自らが例証して下さった。韓国の教科書には伝統として道徳・教訓的テーマが多いものの、2015年の版では外国文化の紹介が大幅に増加し、男女役割の変化を扱う内容も加えられるなど「国際化」の傾向が注目される。一方、「リングフランカとしての英語(ELF)」の高まりを反映して、日本のCMで日本人の登場人物が英語を話す場面が増えているという興味深い知見が報告された。

山口美知代氏(京都府立大学)の司会による前半の研究発表では、いずれもELFの運用がテーマとな

った。ヤコブ・マルシャレンコ氏(名古屋外国語大学大学院)は日本の司法通訳の問題に光を当てた。



基調講演 吉川 寛 日本「アジア英語」学会会長

英語は法廷での使用率が最も高い通訳言語のひとつであるが、英語非母語圏出身の被告は通訳人との意思疎通も難しくなる場合があるという。公正な裁判を考える時、自身が司法通訳人でもある氏の言葉は非常に重い。阿佐美敦子氏(実践女子大学)からは、Skypeを利用した日本とフィリピンの大学生間の異文化交流が紹介された。双方に親近感の向上という大きな収穫があった反面、歴史認識と英語力の差が今後の課題とされた。中村優治氏(慶應義塾大学)の英語による代表発表でも、Skypeによる海外との遠隔授業が分析の対象となった。参加学生のアンケート結果からELFの有用性が裏付けられたが、英語力評価にはInner Circleの英語を規範とするテストが依然として広く用いられており、ELFに配慮した評価法の導入が提言された。

研究発表の後半には、トレント信子氏(東洋英和女学院大学)の司会の元、4編の個別テーマが英語で論じられた。柴田美紀氏(広島大学)は、自己の訛りに対する態度について7ヶ国の大学生を比較した。日本人学習者の否定的な態度とは対照的に、ヨーロッパとマレーシアの被験者は自らの発音に自信を示し、英語母語話者にも十分通じるものと認識している。マレーシアが英語のOuter Circleにあり、言語の多様性

に関するヨーロッパ人の意識が高いことがその理由に挙げられた。後者については、ヨーロッパの被験者の母語と英語が同じゲルマン語派であるという類型を指摘する声もフロアからあり、言語態度研究の奥行きを深さを再認識する機会となった。川島智幸氏(群馬大学)は、著名日本人の高い英語力が、ネイティブ神話からの脱却と日本人英語への自信に繋がることを明らかにした。日本では流暢な日本人話者こそがELFの到達モデルになり得るとの視点は、吉川氏の基調講演の内容にも通じるところがある。米岡ジュリ氏(熊本学園大学)が代表発表した公衆トイレの英語表示をめぐる問題には、最も参加者の注目が集まった。表示の不明瞭さには日本文化の独自性に根差す部分もあるものの、原因の大半は使用者の視点を欠いた直訳的表現にある。トイレはもうひとつのグローバル環境であり、今回の発表はLinguistic Landscapeの研究に新たな分野を開拓したと言えよう。発表後半の締めくくりとしてSHI Jie氏(電気通信大学)は、中国の大学英語教育における近年のESP重視の流れを学会の発表内容を経年比較することで実証した。

今大会のシンポジウムのテーマは、ミャンマーの大学英語教育であった。アウン・サン・スー・チー氏率いる国民民主連盟(NLD)の総選挙圧勝が大きく報じられた直後でもあり、まさにタイムリーな話題であった。



パネリストを務められた三氏は、本学会が8月に主催した同国へのスタディ・ツアーでも中心的役割を果

たされている。まず、橋内武氏(桃山学院大学)が豊富な写真を援用しながら、「アジア最後のフロンティア」と称されるミャンマーの地理と現代史を詳細に説明された。



続いて齋藤智恵氏(国際医療福祉大学)が、英語教育の歴史と教育制度に焦点を合わせた議論を展開した。氏は複数の大学に足を運び、現職教員の声を収録されており、最新の教育事情に触れる貴重な内容であった。

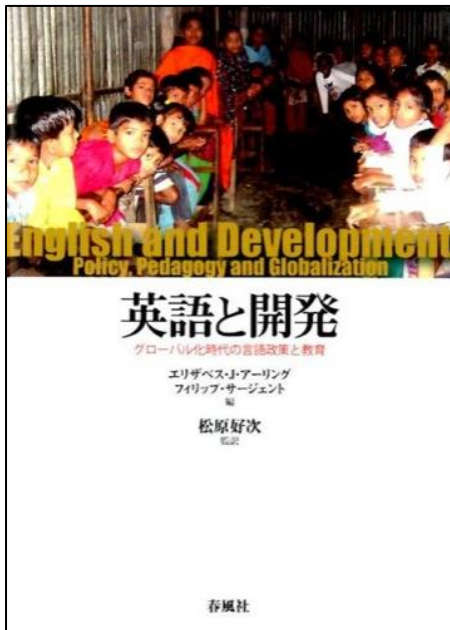


加藤三保子氏(豊橋技術科学大学)は、ITを中心とする工科大学の現況に加えて、現行の大学入試の問題点と今後の展望に言及された。

総じて、現地取材に裏付けられた、しっかり地に足が着いたシンポジウムとの印象が残った。

書籍紹介

本学会会員が関係する出版書籍



「英語と開発: グローバル化時代の言語政策と教育」

Philip Seargeant & Elizabeth J. Erling 編著

松原 好次 監訳

春風社 2015 年 10 月

A5 判、332pp 3,500 円(本体価格)

ISBN 9784861104718

江田優子、杉野俊子、田中富士美、中川洋子、

原隆幸、樋口謙一郎 翻訳

松原好次 監訳・翻訳

(本学会会員、五十音順敬称略)

事務局より

第 38 回全国大会のお知らせ

日 程: 2016 年 6 月 25 日(土)

場 所: 中京大学 八事キャンパス

JAF AE ウェブサイトをご覧ください

<http://www.jafae.org>

研究発表応募: JAF AE ウェブサイトのエントリー画面よりご応募ください。

ニューズレター担当より

ニューズレターは会員の大切なコミュニケーションの場ですので、会員の皆様からのご投稿を歓迎しております。国内外の紀行文、本学会会員出版の書籍紹介(本学会の主旨に関連するもの)、海外情報など、「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、日本語 800~1,200 字程度、あるいは英語では A4 用紙 2/3 ~1 ページ程度の分量でおまとめいただければ幸いです。編集の都合上、投稿を希望される方はあらかじめ、編集担当の田中(fujimitanaka@gmail.com)までご連絡下さるようお願い申し上げます。

編集後記

田中富士美(ニューズレター担当)

12 月の全国大会が行われた東洋英和女学院大学大学院の館内の一角に村岡花子記念展示があり、関連のホームページも特設されている。

<http://www.toyoeiwa.ac.jp/muraokahanako/index>.

「赤毛のアン」を筆頭に児童文学翻訳者として高名な村岡花子は東洋英和女学院の卒業生であり、1913 年(大正 2 年)に卒業。山梨英和女学校で英語教師を 5 年間勤めた。この時代、大正前期の英語教育の一例として、同様に地方の中等教育、広島高等師範学校附属中学の英語教育目標が以下のように記されている。—音韻及び accent を正確に弁別し且つ之を確実に発表し得ること。単語綴方の正確なる観念を得その一般法則に通ずること。運筆を自由にし書法に習熟して正確明瞭に速記し得ること。教科書及び之と同程度の英語を理解し且つ発表し得ること。英米の事物、風俗、習慣等を知ること。英語学習の确实なる基礎を造ること。—そして、4 技能



を偏ることなく教えることの重要性を強調し、さらには外国語学習に対する生徒の「強き好奇心と深き興味」を「満足増進」するように工夫し、「直接間接に好奇心を旺盛ならしめ自発的学習の素地を養成すべきもの」としている(松村、1983)。この後、時の文部大臣大岡育三によって「英語存廃論」が掲げられ、日英同盟失効後、更に昭和初期まで、東京帝国大学教授、藤村作の「英語科廃止論」、立教大学教授、岡倉由三郎の反論まで、英語教育の「廃止」と「重要性」議論は熱を帯びることになる。岡倉は異文化理解を通して文化の相対性に目を開くこと、日本語と異なった言語に触れることを通して言語認識を深め、知的刺激を与えること、英語を媒介として種々の知的感情を摂取し、欧米の文化・文明に原書を通して直接接触れることにより我が国の文化・文明・思想に刺激を与え、その発展に資することが重要と主張していた(佐藤、2002)。そして、この議論はその後も振り子のように数十年ごとに形を変えて繰り返されることとなった。

村岡花子が英語教育に関わったのは 100 年余り前、その後日本に誰もが親しめるような英米文学の彩りを加えることに従事していく。一世紀を経て、日本の英語教育の目標は「英米の事物、風俗、習慣等を知る」「欧米の文化・文明に原書を通して直接接触れる」ことは大きく変容したが、その他においては多くが理念としては引き継がれている。

英語が EIL として ELF として、そして「アジアを結ぶ」言語として存在する今、先人が苦吟し積み上げてきた日本の英語教育を、これから先研鑽していく役割の一端を当学会が担えるものと願ってやまない。

参考文献:

- 佐藤義隆(2002)「日本の外国語学習及び教育の歴史を振り返る—日本の英語学習及び教育目的論再考」『岐阜女子大学紀要』31, pp 43-52.
- 神保尚武、JACET 教育問題研究会(2012)『新しい時代の英語科教育の基礎と実践: 成長する英語教師を目指して』
- 松村幹男(1983)「大正前期における英語教授法研究—広島高師及び同附中の場合」『英学史研究』Vol. 1983 (1982) No. 15, pp 1-14.

2016年3月1日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 吉川 寛

編集長 田中富士美

事務局 〒466-0825

名古屋市昭和区八事本町 101-2

中京大学国際英語学部 榎木 蘭鉄也 研究室 内

E-mail: jafae@live.jp

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Professor Tetsuya Enokizono

Department of World Englishes, Chukyo University

101-2 Yagoto Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-0825 JAPAN

E-mail: jafae@live.jp

JAF AE's homepage

<http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number 00280-8-3239